中古語の「〜となし（無し）」について

―体言・動詞終止形を受ける場合を中心として―

**辻本 桜介

概　要

本稿では、中古語において助詞「と」を形容詞「なし（無し）」が受ける「となし」という形について考え、主に次のことを述べる。（一）「となし」は「と」と「なし」の間に係助詞「は」「も」以外の要素が割り込むことはほぼ無く、緊密に結びついている。また、「なし」はカリ活用を持たない。（二）「となし」などの形が歌語として用いられる一方、「となく（て）」などほぼ散文専用の形もある。（三）体言または動詞終止形に接続する「となし」は、形態的に固定しておらず、それらの体言・動詞も語彙的に多様で生産的である。以上の（一）〜（三）を踏まえて、体言または動詞終止形を受ける用例を分析することにより「となし」の意味を考えた結果、次のことが分かった。（四）「となし」は、前接語の表す事物の存在・発生を否定する意味は持たず、肯定する意も持たない。（五）諸注釈書の解釈では、「となし」は前接語の表す事物の存在・発生を否定するものが大半を占めるが、「〜らしくない」「〜ようでない」「〜というふうでない」等の、様態を描写する表現による訳出のパターンがあり、この方が妥当な解釈である。（六）引用助詞「と」の機能を考慮すると、「〜となし」の「〜と」は、ある事態が一般にどのように認められるかを、「〜と思われそうな様子で」のような意味を持つ引用句として示したものと考えられる。そして、それを「なし」によって打ち消す形を取ることで、「〜と」に引かれるような内容が一般に認められない、という意味を表すことになる。

一　研究対象

中古語においては、次のように、助詞「と」が形容詞「なし（無し）」にかかる構造の例が少なからず見られる。

(1)　歩むともなく、とかくつくろひたれど、足の裏動かれずわびしければ、せん方なくて休みたまふ。（源氏・玉鬘・3-105）

(2)　「いとつれづれにて、わざと遊びとはなくとも、久しく絶えにたるめづらしき物の音など聞かまほしかりつる独り琴を、いとよう尋ねたまひける」とて、宮も、こなたに御座よそひて入れたてまつりたまふ。（源氏・鈴虫・4-383）

通常、形容詞「なし」は体言を主語にとり、その体言の表す事物の存在を否定する。次の例では、主語（二重傍線部）の表す事物（人）の存在を否定している。

(3)　散らしければ、誰も誰もおどろき惑ひて、見れば、部屋には人もなし。（落窪・二・138）

これに対し、「〜と」を受ける「なし」の用例を見ると、例えば次の(4)では、主語に当たる体言（二重傍線部）「おつる山水」の存在は否定されてい

ない。否定されるのは、「いづれと」の部分に関する何らかの意味合いだろう。従来の研究では、「〜と」が体言に相当するという主張も見られたが、二節で見るように、そのような考え方は妥当でない。

(4) ふるさとをこふるた本はきしちかみおつる山水いづれともなし（恵慶法師集・52）

本稿では、このような構造で用いられる助詞「と」＋形容詞「なし」を考察対象とする。以降の「ともなく」「とはなくとも」「ともなし」などの、他の助詞が参入した形態もまとめて「となし」と呼ぶ（つまり「と」から続く部分を文節単位で取り出して「となし」と呼び、分析対象とする）。

「と」と「なし」が共起することについては、次のような疑問点がある。

（一）通常、形容詞「なし」は、名詞句を主格成分とし、その名詞句の意味する事物の存在を否定するが、「となし」は名詞句とは異なる「〜と」という成分を否定しているように見える。

（二）「なし」によって否定されるのが何であるか判然としない。(1)であれば、「歩む」という動作が否定されるかのようにも読めるが、後続節で「とかくつくろふ」とあり、「歩む」に相当する動きは起きているとも読める。

本稿ではこの疑問点を解決するため、「となし」の用例調査・分析を試みる。

なお、近現代語においても、次のように用いられることはあるが、書き言葉的な表現となっている[1]。

(5) ヨーロッパの公園で、ダラダラといつ果てるともなくボール遊びに打ち興じている高齢者の姿を目撃したことがあろう。（岡沢憲芙『「もうひとつの人生」への案内』／ＢＣＣＷＪ）

現代語では「と（も）なく」という形で固定的になっているようであり、(2)のように係助詞「は」が普通に用いられる中古語とはかなり状況が異なると考えられる。本稿では現代語の「となし」については触れないこととしたい。

二　先行研究

管見の限り、「となし」の意味・機能を主たる検討対象とした論文は見当たらない。本節では、上代語の「となし」に言及しているものも含めて先行研究を概観する。

二―一　「となし」の意味と統語的構造に関して

時枝（一九五四）は、「となし」の「なし」を助動詞と見ている。詳しい説明は無いが、「と」との緊密な結びつきに注意したものだろう。

佐伯（一九六三）は、万葉集の「と」が、「寝よとの金」「あはむとならば」「しるすとならし」のように用いられることから、「〜と」が体言的なところがあるとする。その上で、「〜と」を「なし」が受けることについて、「納得がいく」と述べる。すなわち、形容詞「なし」は、通常は体言を主語に取るため、「〜と」を体言と見なせるかどうかを検討したということだろう。しかし、次のような用例があることを考慮すると、佐伯の主張には従いがたい。

(6) なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きなる河あり。それをすみだ河といふ。（伊勢・九・122）

(7) この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひいひて、「波の立つなること」とうるへいひて、よめる歌、…（土佐・一月七日・22）

助詞「の」や助動詞「なり」が、体言以外の要素に接続している。従って、「〜と」に「の」や「なり」が接続することが、「〜と」に「体言的なとこ

ろがある」ことの根拠になるという佐伯の記述は妥当とは言いがたいと言える。

小林賢次（一九六八）は、「となし」の「と」に判断的陳述は認められず、「なし」は詞としての概念性が強い、とするが、この主張にも納得しがたい。まず、「と」に判断的陳述が無いとはどのようなことを言おうとしているか判然としない。また、小林はそのように主張する根拠として、「「いづことなし」「なにとなし」などの用法を考えると」と述べているが、「いづことなし」などの用法というものを、一体どのように「考えると」、判断的陳述という話に結びつくというのだろうか。「考える」ということの内容が示されておらず、説明としては不十分である。

以上のように、「となし」の文法的な性格については、十分な理解が得られているとは言えない状況にある。ただし、小田（二〇一五）では「となし」が複合辞の一種として掲出されており、示唆的である。これについては三節で触れる。

二―二　上代の「いけるともなし」をめぐる議論

万葉集に、「いけりともなし」あるいは「いけるともなし」と読む次のような歌があり、「ともなし」が、助動詞リの終止形「り」を受ける場合と、連体形「る」を受ける場合があることが議論の対象となってきた。

(8)　衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし［生跡毛無］（万葉・二・212）

(9)　白玉の見が欲し君を見ず久に鄙にし居れば生けるともなし［伊家流等毛奈之］（万葉・十九・4170）

上代特殊仮名遣いにおいて、助詞の「と」は乙類、名詞の「と」は甲類と考えられている。(8)の「と（跡）」は乙類である。従って助詞の「と」であり、文相当の語句を引用すると解するならば、前接する活用語は終止形を取ると見るのが自然だろう。「いけりともなし」と読めば特に問題は無い。これに対し、(9)の「と（等）」も乙類であるが、(8)の場合と異なり、前接する活用語は連体形である。

この(9)の「と」については、山口（一九七〇）、井上（一九七六）、間宮（一九九〇）、佐佐木（二〇〇五）等が言及している。これらの研究を見る限り、連体形文末を引用助詞トが受けることは、意図的にせよ非意図的にせよ、大伴家持が自分の母語感覚と異なる形で書いたことによると考えるのが一般的のようである。

これらの議論は、「いけるともなし」の「と」の品詞的性格を見定めようとするものであり、「となし」という連語的語形の持つ意味や統語的構造についてはさして言及していない。ただし、後述（七節）するように、中古語の用例を検討する際にも、連体形を受ける「となし」の存在には注意する必要がある。

二―三　従来の訳出方法

次に、国語辞書等で「となし」にどのような訳出方法が示されているかを見る。

表1では、『日本国語大辞典』（第二版）の、「となし」を含む連語的な表現についての記述を示した。連語的な表現を立項して意味記述を行っているのは、「となし」が、ある程度、固定的な形で用いられると見ているためだろう。

国語辞書を除くと訳出方法に言及する研究は少ないが、桑田（二〇〇一）は、「とはなしに」の形が「というわけではなしに」の意に取られるものとしている。小田（二〇一五）は、「…というほどでもない」「…というわけではない」「…と明らかにしない」の意に取られるとしている。

これらを見渡し、「Xとなし」という表現がどのように解釈されるかのパターンを整理すれば、次のようになるだろう。

A　Xという事物の存在・発生が否定される意味で解した訳し方

・Xというわけではない
・Xというほどでもない
・Xということはない

B　Xという事物の存在・発生が否定されない意味で解した訳し方

・Xと感じられない
・はっきりXということがない、Xと決まっていない
・Xということに限らない（X以外も含めた全体にわたる）
・意図的にXするわけではない
・Xということが明らかではない

いずれも、「Xという…」のように、語句を引用するような形で訳出する点は共通している。しかし、文脈中に登場する人物の発言や思惟を引用する「～と言ふ」「～と思ふ」などの引用表現とは異質のものだろう。また、表1に示す連語的表現に固定化していたらしいことから見て、構成要素である「と」「無し」のそれぞれの語性を単純に合計するだけでは導き出されない意味を派生している可能性もある。

語形	意味	初出資料
いけりともなし	生きているとも感じられない。生きているように思われない。	万葉集
いけるともなし	生きているというしっかりした気持がない。	万葉集
いずくともなし	「いずこ（何処）ともなし(1)」に同じ。	宇津保物語
いずこともなし	(1)どこへというあてもない。 (2)どこというはっきりした所もなく、ぼんやりとしている。 (3)どこという限定もない。一面に。	(1)貫之集 (2)更級日記 (3)曾丹集
いずちともなし	どこをめざしてというわけでもない。いずくともなし。	源氏物語
いずれとなし	どちらがどうということもない。同じようだ。優劣がつかない。	宇津保物語
いずれともなし	「いずれ（何―）となし」に同じ。	枕草子
いつとなし	いつという定まった時もない。いつまでもずっとするさま。	落窪物語
いつともなし	「いつ（何時）となし」に同じ。	源氏物語
きくとはなし きくともなし	はっきりと聞いたということもできないくらいだ。また、特に耳をすまして聞くということではない。	後撰和歌集
ことぞともなし	特にこれということもない。何ということもない。たいしたこともない。あっけない。	古今和歌集
そこどころともなし	どことさすところもない。とくにどこということもない。	源氏物語
そのこととなし	とりたててそのことと、いうこともできない。格別な原因、理由、目的などはないがの意で用いる。	伊勢物語
そのものともなし	(1)とりたてていうほどのものでもない。たいしたものでない。 (2)なんともえたいが知れない。なんともたとえようがない。	(1)枕草子 (2)大鏡
ときぞともなし	いつともきまっていない。定まっている時がない。いつも。	万葉集
ときとなく	いつと定まった時もなく。いつと時間もきめずに。いつともなく。	万葉集
となし（とない）	…ということもない。…というわけでもない。	万葉集
とはなしに	ということなしに。…ではないのに。	万葉集
ともなし	(1)体言あるいはそれに準ずる句に付いて、そのように限定するわけにはいかない状態であるさまを表わす。 (2)動詞の終止形に付いて、その動作がとりたてるほどではないさま、特に意図したものではないさまを表わす。	(1)万葉集 (2)源氏物語
なにとはなし	事物、状況、原因などに関して、これと特定し得ないさま。どうということもなく。	土左日記
なにとなし	(1)事物、状況、原因などに関してこれと特定し、またはどれと限定し得ないさま。これということもない。どれときまったわけではない。 (2)とり立ててどうという特徴のないさま。特に変わったことはない。平凡だ。ありきたりだ。	(1)枕草子 (2)源氏物語
なにともなし	「なにと（何―）なし」を強めたいい方。	小町集
なるとはなし なるともなし	いつ成就するというあてもない。必ず成就するというわけでもない。	後撰和歌集
ふたこととなく	一言のもとに。異議なくすぐに。	大鏡
ふたつとなし	同じものがふたつはない。転じて、かけがえがない。	竹取物語
わざとなし	格別に心を用いているさまではない。なにげないさまである。自然なさまである。わざとならず。	源氏物語

表1:『日本国語大辞典』（第2版）で掲出される「～となし」の意味記述

二―四　問題点の整理

先行研究を見る限りで「となし」に関して分かっていることは、「～という…ない」のような形で、語句を引用する表現と関わる訳し方のパターンが複数あるということのみと言って良い。

「となし」という形式が、『日本国語大辞典』が示すような、多くの意味合いで捉えられるとしても、それはどのような事情によるのだろうか。複数の意味を担う場合、それらは互いに無関係なのではなく、何らかの意味的関係を想定できるものと想像される。

また、連語的な表現に固定化している面を持つようではあっても、『日本国語大辞典』では、前接語として「いつ」「なに」等の不定表現、動詞終止形、体言などが示されており、多様である。「と」と「なし」の間に係助詞が介在するか否かや、「なし」の活用形と後接語など、形態的なバリエーションもある。「となし」がいかなる形態を取りうるか、またどのような語が前接するかといったことを、用例の調査によって明らかにする必要があるだろう。

三　用例調査

本節では、用例の調査結果の概要を示す。

まず、散文系の諸資料から、助詞「と」の用例を網羅的に調査し、それが「なし（無し）」にかかる例を全て抽出した。また、十分な用例数を得るために、歌集も調査対象に加えることにした[二]。なお、散文系の諸資料の調査結果から、「と」と「なし」の間に介在しうるのは係助詞のみであることが分かったため、歌集の調査においては、「と」の用例を網羅的に見ることはせず、「と（＋係助詞）＋なし」の用例を抽出することにした。

表2では「となし」の各形態ごとのデータを、表3では「となし」の前接語のデータを示した。表3の「不定表現」には、「いつ」「なに」「たれ」やそれを伴う不定表現としての文を分類し、「ソ系指示表現」には「それ」「そのこと」「その人」などの指示語「そ」を伴う表現を分類してある。

		合計	未然形	連用形													終止形						連体形					已然形					
			とこそなからめ	とやなかりけむ	となく	となく（＋こそ／のみ／も）	となくて	となくては	としもなくて	とはなく	とはなくて	とはなくとも	ともなく	ともなくて	ともなくのみ	としもなし	となしに	とはなし	とはなしに	ともなし	ともなしに	となき（＋かな／こそ等）	となき（＋体言）	ともなき（＋が／に等）	ともなき（＋体言）	とはなきか	となければ	となければ	とはなければ	とはなければも	ともなければ	ともなければ
散文系資料	竹取物語	1																					1										
	伊勢物語	2			1								1																				
	大和物語	4		1					1				1	1																			
	土佐日記	1																	1														
	蜻蛉日記	8					1				1		1	1					1								1		1		1		
	落窪物語	2	1		1																												
	宇津保物語	23			5	1		1					5	4								1	1		1		1	1		1			1
	枕草子	11			3								4												3		1						
	源氏物語	118			28		10	1			5	2	23	4	1	1			1		1	2	11	4	5		4	1	13	1			
	和泉式部日記	1																					1										
	紫式部日記	2			1																						1						
	更級日記	9			5								1	1										2									
	夜の寝覚	17			6		1			1			4	2								2					1						
	浜松中納言物語	28			11	1	1	1			1		6									2	2	1	2								
	栄花物語	31			12		1						9	3								2	2				2						
	堤中納言物語	3												1									1						1				
歌集	古今和歌集	2																	1						1								
	後撰和歌集	11			1								4						4		1				1								
	拾遺和歌集	9											1	1					2	2					3								
	後拾遺和歌集	6			1								1	2								1			1								
	歌合類	14			5	1					1		3						2	1					1								
	私家集	160			26		1				9		25	14		1	1	2	22	15	8	3	6	9	17	1							
合計		463	1	1	106	3	15	3	1	1	17	2	89	34	1	2	1	2	34	18	10	13	25	16	35	1	11	2	15	2	1	1

表2

全体の状況から、次のことが言える。

各資料は、上から順に概ね成立時期の古いものから並べたが、特に通時的な変化は見て取れない。また、資料の規模に応じた用例数が得られることも分かる。「となし」に関しては、中古語において、一般に広く用いられた語と了解できる。

次に、「と」と「なし」は緊密に結びついており、間に介在できるのは一部の係助詞に限られる。この点から見て、小田（二〇一五）のように「となし」を複合辞と捉えることも可能と思われる。また、「なし」の活用形は、連用形の「なく」、終止形の「なし」、連体形の「なき」、已然形の「なけれ」にほぼ限られ、カリ活用は殆ど用いられない。よく知られるように、カリ活用は歴史的には後発的に生じた、新しい語形である。「と」と「なし」がほぼひとまとまりとなって固定していること、また、通時的に新しく生じた活用体系が入り込めなくなっていることから見て、「となし」は中古語においてすでに古い表現として意識されていた可能性を考慮すべきだろう。

次節では、そうした文体的な問題について考察するため、和歌の用例と、散文の用例とを比較したい。

		合計	体言	用言						助動詞										不明
				動詞終止形	動詞連体形	動詞命令形	形容詞終止形	形容詞連体形	形容動詞終止形	ツ	リ	ル（リの連体形）	ズ	ム	ことぞ	ときぞ	ソ系指示表現	さ（指示副詞）	不定表現	
散文系資料	竹取物語	1	1																	
	伊勢物語	2													1		1			
	大和物語	4	1	1													1		1	
	土佐日記	1		1																
	蜻蛉日記	8	1	3	1														3	
	落窪物語	2		1															1	
	宇津保物語	23	2	4							1			1			3		12	
	枕草子	11	1	1													1		8	
	源氏物語	118	12	18		1	3								1	3	13	2	65	
	紫式部日記	2												1					1	
	和泉式部日記	1																	1	
	夜の寝覚	17	1	3					1								2		10	
	浜松中納言物語	28	3	4										1			2		18	
	更級日記	9																	9	
	栄花物語	31		2				1									3		25	
	堤中納言物語	3		1													1		1	
歌集	古今和歌集	2	2																	
	後撰和歌集	11	2	2						1					2				4	
	拾遺和歌集	9		2												2			5	
	後拾遺和歌集	6													1				5	
	歌合類	14	2	2									1		1		1		7	
	私家集	160	25	46		1	2				1	1	3	1	6	2	4		64	4
合計		463	53	91	1	2	5	1	1	1	2	1	4	4	12	7	32	2	240	4

表3

四　和歌と散文

宮田（一九五九）は、「とはなしに」「ともなしに」「ともなしの」「となしに」のように「なし」が終止形で用いられる形と、「ことぞともなく」「ときぞともなき」のように、終助詞ゾを受ける形を、「歌語」と見ている。ただし、日本語史の術語としては、「歌語」の定義は曖昧であり、宮田（一九五九）も特にその定義を述べてはいない。ここでは桜井（一九八二）、佐藤（一九九六）に従って、和歌のみに用いられる表現を「歌語」と呼ぶことにする。

表４・５は、和歌と散文とで、「となし」の用例がどのように現れるかを示したものである。表４は「なし」の活用形ごとに示し、表５は「となし」の前接語ごとに示した。これらの表において「和歌」は、散文系資料に現れる和歌の例も含み、「散文」は歌集の詞書も含む。

まず、宮田（一九五九）の示すように、「なし」が終止形の場合と、「ことぞ」「ときぞ」を受ける場合とは、わずかに例外があるものの、歌語と見て良いだろう。

一方で注目すべきは、歌集に用いられず、散文のみに現れる形である。「なし」の活用形に着目すると、「となく（て）」と「とはなけれど」は、和歌では用いられないが、散文では用いられる。また、前接語に着目すると、「そのこととなく」「それとなく」などのようにソ系指示表

現を受ける「となし」は、和歌では殆ど用いられないが、散文ではしばしば用いられる。こうした、散文専用というべき形があるという事実は、「となし」が、歌語に限らず、日常的な表現の中で、生産的に用いられたことを示すだろう。先述の通り、「と」と「なし」とは緊密に結びつき、活用の仕方も固定的になっていたが、なお中古語における通用の言葉としての位置を保っていたと見られるのである。

「なし」の活用形	未然形	連用形													終止形						連体形					已然形					
	とこそなからめ	とやなかりけむ	となく	となく（＋こそ／のみ／も）	となくて	となくては	としもなくて	とはなく	とはなくて	とはなくとも	ともなく	ともなくて	ともなくのみ	としもなし	となしに	とはなし	とはなしに	ともなし	ともなしに	となき（＋かな／こそ等）	となき（＋体言）	ともなき（＋が／に等）	ともなき（＋体言）	とはなきか	となければ	となければ	とはなければ	とはなければども	ともなければ	ともなければ
散文	1	1	74	3	15	3	1	1	11	2	56	22	1	1			1		1	9	21	8	9		10	1	15	1	1	1
和歌			32						6		33	12		1	1	2	33	18	9	4	4	8	26	1	1	1		1		

表4

	体言	用言						助動詞					ことぞ	ときぞ	ソ系指示表現	さ（指示副詞）	不定表現	不明
		動詞終止形	動詞連体形	動詞命令形	形容詞終止形	形容詞連体形	形容動詞終止形	ツ	リ	ル（リの連体形）	ズ	ム						
散文	19	38	1	1	3	1	1	1			1	3	1		30	2	168	
和歌	34	53		1	2			1	1	1	3	1	11	7	2		72	4

表5

五　体言・動詞終止形に接続する用例の分析

前節では「となし」が固定的な面を持ちつつも、一方では、散文のみの用法を持つという、生産的側面があることを見た。そこで、生産的な用いられ方に着目して分析を行い、中古語の「となし」のあり方を考察したい。

表6では、調査により得られた用例を、前接要素の種類と、「となし」の語形との組み合わせによって示した。これにより、「となし」が前接語も含めてどのような語列として現れるかがわかる。

前接語に着目すると、不定表現、動詞終止形、体言の用例が多い。これらは詳しい分析に堪えるだろう。ただし、不定表現は「となく」「ともなく」という語形と結びつきやすく、語形が固定化する事情を持っていたようである。また、「いつ」「いづれ」「たれ」「なに」の四種を受ける用例だけで大半を占めており、この点でも固定的な側面を持つ。一方、動詞終止形または体言に接続する場合は、特に一部の語形に固定化している傾向は見て取れない。体言・動詞の語彙もバリエーションに富む。また、「となし」の各形態の用例の使用頻度は、動詞終止形と体言とでほぼ同一傾向であることも見て取れる。

以上を考慮し、本節では体言および動詞終止形に接続する「となし」の意味について考えたい。

五―一　前接語の示す事物の存在・発生が否定されないこと

「となし」は、「なし」という語が含まれることから、何らかの事物の存在・発生が否定されることが予想される。二節では、「Xとなし」の解釈のパターンを整理し、大きな分類枠として、Xという事物の存在・発生

が否定される場合と、そうでない場合とがあることを述べた。前者の解釈のように、Xという事物の存在・発生が否定されると見るならば、「と」の無い「Xなし」と同義という見方が可能になるだろう。しかしこの解釈に従うと、「と」という助詞が介在することについて疑問が残る。

まず、前接語の表す事物が存在または発生する文脈の例を見たい。

《体言に接続する例》

(10) 入りたまひても、宮の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。（源氏・朝顔・2・494）

(11) 国守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕うまつる。かかる旅所ともなう人騒がしけれども、はかばかしうものをものたまひあはすべき人しなければ、知らぬ国の心地していと埋れいたく、いかで年月を過ぐさましと思しやらる。（源氏・須磨・2・188）

(12) …かたちはさもこそあらめ、心ばへなどさへ、さる奥山のふところより生ひ出で給へる人ともなく、いとあてにおほどかに、をびれたるさまながら、らうらうじうにほひ多かる方さへをくれず、思ふさまに飽かぬ事なふ、よろづに優れ給へるさま、…（浜松・四・384）

「なし」の活用形	「となし」を含む文節の形	体言	用言						助動詞					ことぞ	ときぞ	ソ系指示表現	さ（指示副詞）	不定表現	不明	合計
			動詞終止形	動詞連体形	動詞命令形	形容詞終止形	形容詞連体形	形容動詞終止形	ツ	リ	ル（リの連体形）	ズ	ム							
未然形	とこそなからめ												1							1
連用形	とやなかりけむ															1				1
	となく	2					1									4		99		106
	となく(+こそ／のみ／も)																	3		3
	となくて	1		1												8		5		15
	となくては															3				3
	としもなくて		1																	1
	とはなく																	1		1
	とはなくて	2	6													4	2	3		17
	とはなくとも	1																1		2
	ともなく	12	15									1		7	4	2		47	1	89
	ともなくて	3	7		1					1		2						20		34
	ともなくのみ																	1		1
終止形	としもなし		1																1	2
	となしに		1																	1
	とはなし	1	1																	2
	とはなしに	18	14						1									1		34
	ともなし	5	4		1					1	1		1					5		18
	ともなしに	2	4			1												2	1	10
連体形	となき(+かな／こそ等)															3		10		13
	となき(＋体言)	2														2		20	1	25
	ともなき(+が／に等)		8									1	1					6		16
	ともなき(＋体言)	3	13			1								5	3			10		35
	とはなきか		1																	1
已然形	となけれど		3					1								3		4		11
	となければ															2				2
	とはなけれど	1	10			3												1		15
	とはなけれども		2																	2
	ともなけれど																	1		1
	ともなければ												1							1
合計		53	91	1	2	5	1	1	1	2	1	4	4	12	7	32	2	240	4	463

表6

《動詞に接続する例》

(13) とこなつのはなのつゆにはむつれねどぬるともなくてぬれし袖かな（実方集・227）

(14) たのむるをたのむべきにはあらねどもまつとはなくてなほやまたまし（相模集・46）

(15) 言ふともなき口ずさびを恨みたまひて、「逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変らざらなむこの音違はぬさきにかならずあひ見む」と頼めたまふめり。（源氏・明石・2・267）

まず体言に接続する例を見ると、(10)では、「夢ともなく」とあるが、眠りながら見たこと、すなわち夢について述べている。(11)では、「かかる旅所ともなう」とあるが、「かかる」という直示表現からわかるように、目の前の「旅所」について述べている。(12)では、「さる奥山のふところより生ひ出で給へる人ともなく」とあるが、山深いところで生まれた人について述べている。いずれの「となし」も、「～らしくない」のような訳が当たるだろう。

次に動詞に接続する例を見ると、(13)では「ぬるともなくて」とあるが、直後に「ぬれし」とあるように、濡れたことを述べている。(14)では「まつとはなくて」とあるが、直後に「なほやまたまし」とあるように、待つことを意図している。(15)の「言ふともなき」は、言う行為を表す「口すさび」を修飾している。

右に見たような表現があることから、「となし」は、前接語の表す事物の存在・発生を否定する表現ではないと考えられる。単純な否定の意味にならないことは、助詞「と」が何らかの形で関与することを示すだろう。

では逆に、前接語の表す事物の存在・発生を意味するかというと、そういうわけでもない。

(16) きみこふとわれこそむねをこがらしのもりとはなしにかげになりつつ（古今和歌六帖・1050）

(17) なにはがたみぎはのあしにたづさはるふねとはなしにある我が身かな（和泉式部集・284）

(18) 「これこそは、かぎりなき人の御さまなれ」と、見るに、姫君の、床よりおりて、ひきつくろふともなくうちとけて、御衣ばかり奉りかへたる、紅梅の八ばかり、萌黄の小袿、袖口・裾のつままで、…（寝覚・一・89）

(16)では、「こがらしのもりとはなしに」とあり、実際に詠み手が森であることはありえない。(17)では「ふねとはなしに」とあり、やはり実際に詠み手が船であることはありえない。(18)の「ひきつくろふともなく」も、直後の「うちとけて」が示すように、実際に身繕いすることなく寛いでいるのである。

このように「となし」は、前接語の表す事物の存在・発生について、否定も肯定もしない。次のような用例が得られるのもそのためだろう。

(19) こひやせむわすれやしなむぬともなくねずともなくてあかしつるかな（高光集・32）

(20) うつつともゆめともなくてあけにけるけさのおもひはたれまさるらん（相模集・65）

(21) むすぶともとくともなくてなかたゆる花田の帯の恋はいかがする（匡衡集・75）

寝ることと、寝ていないこととは両立しない。一方が事実でないならば、必ず他方が事実となるはずである。(19)の「ぬ」と「ねず」、(20)の「うつつ」と「ゆめ」は、主節事態の起きている世界の中の出来事であるとすれば、一方が必ず成立しているはずである。「となし」が否定するのは、前節語の表す事物でないことを端的に示す用例と言えよう。(21)の「むすぶ」「とく」も同様である。

五―二　「となし」の用例の解釈

先行研究においては、「となし」の意味については詳しい分析はなされていない。しかし、注釈書等では、前後文脈に合致するように、何らかの訳し方をあてはめている。本項では、そうした訳出例を集めて検討し、「となし」の表しうる意味の範囲を絞り込みたい。

動詞終止形または体言に接続する「となし」の用例について、現代語訳を参照することのできた注釈書は次の通りである。

《全集類》

・新日本古典文学大系：後撰和歌集・拾遺和歌集
・新編日本古典文学全集：蜻蛉日記・宇津保物語・古今和歌集・枕草子・源氏物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・栄花物語・堤中納言物語
・日本古典文学大系：亭子院歌合
・和歌文学大系：貫之集・友則集・躬恒集

《個別の注釈》

家永香織・加藤睦・松本真奈美・安村史子（一九九二）「『山田集』注解」『東京水産大学論集』二七　pp.1-22
木船重昭（一九九二）『中務集　相如集　注釈』大学堂書店
呉羽長（二〇〇二）「藤原義孝集注釈（四）」『富山大学教育学部紀要』五六　pp.146-156
古今和歌六帖輪読会（二〇一四）『古今和歌六帖全注釈　第二帖』お茶の水女子大学附属図書館（E-book サービス）
古今和歌六帖輪読会（二〇一六）『古今和歌六帖全注釈　第三帖』お茶の水女子大学附属図書館（E-book サービス）
後藤祥子（二〇〇〇）『元輔集注釈』貴重本刊行会（第二版）
佐伯梅友・村上治・小松登美（一九七七）『和泉式部集全釈―続集篇―』笠間書院
笹川博司（二〇〇六）『高光集と多武峰少将物語―本文・注釈・研究―』風間書房
清水彰（一九七五）『四条宮下野集全釈』笠間書院
新藤協三・河合謙治・藤田洋治（二〇〇六）『公忠集全釈』風間書房
関根慶子・山下道代（一九九六）『伊勢集全釈』風間書房
武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ（一九九一）『相模集全釈』風間書房
竹鼻績（一九八九）『小大君集注釈』貴重本刊行会
竹鼻績（一九九三）『実方集注釈』貴重本刊行会
竹鼻績（一九九八）『馬内侍集注釈』貴重本刊行会
中川博夫（二〇一〇）『大弐高遠集注釈』貴重本刊行会
南波浩（一九七三）『紫式部集　付　大弐三位集・藤原惟規集』岩波書店
林マリヤ（二〇〇〇）『匡衡集全釈』風間書房
平野由紀子（二〇〇三）『信明集注釈』貴重本刊行会
平野由紀子・千里集輪読会（二〇〇七）『千里集全釈』風間書房
平安文学輪読会（一九八九）『長能集注釈』塙書房
増田繁夫（一九九五）『能宣集注釈』貴重本刊行会

次の各資料からも1～3例得られたが、注釈を参照できていない。しかし右に示す注釈の一群によって、「となし」にどの程度の解釈の幅があるかを確かめることは可能だろう。

朝忠集・古今和歌六帖（2493・2570・2623）・忠見集・亭子院殿上人歌合・道命阿闍梨集・長能集・入道右大臣集・禖子内親王家歌合（治暦四年）・源順集・嘉言集

表7・8は、参照できた注釈書における、動詞終止形または体言に接続する「となし」の訳出部分を一覧にしたものである。便宜上、語尾は全て

前接語の表す事物の存在・発生を否定する	
～でない	11
～というわけでない	6
～ということもない	1
小計	18
前接語の表す事物の存在・発生を否定しない	
～というでもなく	1
～とおもえないくらいだ	1
～らしくない	2
～のようでない	2
小計	6
「～の区別が無い」に類する意で解されるもの	
～とも～とも定かでない	1
～とも～とも分からない	1
～の区別がない	2
～のけじめがない	1
～も～もない	1
～を問わない	1
どれが～、どれが～ということがない	1
小計	8
「唯一だ」の意を持つ「二人となし」「二つとなし」	3
原文同様に「となし」で訳出	1
意訳がなされており「となし」をどう解したか判然としない	3
不明	1

表７：体言接続の訳され方

前接語の表す事物の存在・発生を否定する	
～ことはない	7
～でもない	6
～ということでない	2
～という状態でない	1
～というのでない	10
～というほどでない	5
～というわけでない	9
～しない、していない	3
～ようもない	1
～わけでもない	11
～ということはない	6
～というわけにもいかない	1
～といえないくらいだ／ほどだ	2
小計	64
前接語の表す事物の存在・発生を否定しない	
～つもりでない	1
～というふうでない	1
～とおもわれない	1
～はずもない	1
～様子もない	1
～ようとは思っていない	1
小計	6
原文同様に「となし」で訳出	6
意訳がなされており「となし」をどう解したか判然としない	4
別の底本から意味の通る本文を推定して解釈している	1

表８：動詞接続の訳され方

終止形で揃え、係助詞「は」「も」の介在の仕方についても代表的な形を一つ示すにとどめている（例えば「～ことはない」は「こともなく」などの語形も含めている）。

さて、様々な訳出パターンがあるが、その大半は、前接語の表す事物の存在・発生を否定する訳し方である。前項五―一では、「となし」は前接語の表す事物の存在・発生を否定するわけではないことを確認したが、多くの注釈書では、「～というのではない」「～わけではない」「～でない」等の、前接語の表す事物の存在・発生を否定する表現で訳出しているわけである。

(22) たまもかるあまとはなしにきみこふるわがころもでのかわくときなき（亭子院歌合・58）

日本古典文学大系訳：海に潜って藻を刈る海人でもないのに、私の袖は、あなたを恋い慕って流す涙に乾く時とてないことだ。

(23) 関こゆる道とはなしにちかなからとしにさはりて春をまつ哉（後撰・506）

新日本古典文学大系訳：関所を越えてやってくる道というわけでもありませんのに、近くにいながら、年に邪魔されて、春に逢えずに待っている私でありますよ。）

(24) いづ方に寄りはつともなく、はてはてはあやしきことどもになりて明かしたまひつ。（源氏・帚木・1・91）

新編日本古典文学全集訳：どこにどう決着するということもなく、おしまいは埒もない話の数々になって、夜をお明かしになった。

(25) それを、いかに、朝臣の、国母の仇ありともなくて、また、さる薬要ずる后ありともなくて、にはかに親を捨てて渡らむに、少しもののわづらひあり、不孝になりなむ。（宇津・内侍督・414）

新編日本古典文学全集訳：それをどうしてそなたは、后の悪意があるわけでもなく、また不死薬を必要とする后がいるというわけでもないのに、急に親を見捨ててそのようなところに行こうとするのは、少し厄介なことであり、親にも不孝となるだろう。

これらは、誤訳とまでは言えないかもしれないが、少なくとも、逐語訳にはなっていないと考えるべきだろう。

そこで、他の訳し方にヒントを求めると、次のような訳出方法もある。

(26) 内裏などにも、ことなるついでなきかぎりは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくて籠りはべれば、よろづうひうひしう、よだけくなりにてはべり。（源氏・行幸・3・297）

新編日本古典文学全集訳：近ごろは、宮中などにも、特別の用件でもないかぎりは参上いたしませず、朝廷に仕える者らしくもなく邸に閉じこもっておりますので、万事に不慣れになって、何をいたすにもおっくうになってしまいました。

(27) …、中納言中ぞらに思ひわび給ふ心のうちにもおさおさをとり給はず、ありがたうよろづを心つよう思ひとれる人ともなく思わぶ

るさまをききたまひつつ、いとあはれにおぼさるれば、（浜松・一・207）

新編日本古典文学全集訳：帰国を前にした中納言がどっちつかずに思い悩んでいらっしゃる心の中に比べても、后は后で、決してひけをお取りにならずに、めったにいない、万事を気強く思い決めている人のようでなしに、思いわずらう様子を中納言はお聞きになるが、そうなると、自然にとてもしみじみ慕わしくお思いになるので、

(28) いたづらにさきつるはなかみやこ人かよふともなき宿のあたりに（大弐高遠集・40）

『大弐高遠集注釈』訳：ただ無駄に咲いている桜の花なのか。都人が見に通ってくるというふうでもないこの家の辺りで。

(29) 「いとあやしう、おこたるともなくて日を経るに、いと惑はれしことはなければにやあらむ、おぼつかなきこと」など、ひとまにこまごまと書きてあり。（蜻蛉・上・142）

新編日本古典文学全集訳：「ほんとにどうしてなのか、病気のよくなる様子もなくて日数を重ねたうえに、今度みたいにひどく苦しんだことはなかったせいだろうか、あなたのことが気がかりで」などと、人のいないすきをみて、こまごまと書いてある。

これらのように、「〜らしくない」「〜ようでない」「〜というふうでない」等の、様態を描写する表現でも訳出できる点は注目される。前接語の表す事物が実際に存在しない文脈でも、この解釈は通じる。動詞終止形・体言に接続する場合以外についても、この解釈は通用するようである。

(30) とりたててよしとはなけれど、他人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。（源氏・常夏・3・243）

新編日本古典文学全集訳：特別器量がよいというわけではないけれども、どうしてもこれを赤の他人と言いはるべくもなく、鏡に見るご自身のお顔と思い合せられるにつけても、内大臣はとんでもない宿縁にうんざりなさるのであった。

(31) …、法師は、そのこととなくて御文聞こえうけたまはらむも便なければ、自然になんおろかなるやうになりはべりぬる。（源氏・手習・6・335）

新編日本古典文学全集訳：法師というものはこれといった用事もなしに女人のあなたにお手紙をおあげしたり、またいただいたりするのも不都合なことですから、おのずとご無沙汰になってしまいました。

(32) 嘆きつつわがよはかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく（源氏・賢木・2・106）

新編日本古典文学全集訳：嘆きを繰り返しながら、わが世をこうして過せというのだろうか。夜は明けても、胸の思いのあけるときもなくて

(33) 笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ（源氏・紅葉賀・1・338）

新編日本古典文学全集訳：笹を踏み分けてあなたに会いに行ったら、他の人がわたしを見咎めることでしょうに。いつということなく多くの馬が慕い寄って行くらしい、森の木隠れがあなたのところだから

(34) 「なさけなきやうにこそ思へ。たれともなくて消息せばや」と思へば、…（寝覚・一・60）

新編日本古典文学全集訳：「こんな折に手紙をやるのも心ない仕打ちと思うが、誰ということもなく便りをしたいもの」と思うのだが、…

(30)は「という様子でもないが」と訳しても意味が通る。(31)のようにソ系の指示表現を伴う慣用的な言い回しも、「そのことだという様子でなく」のよ

うに訳せるだろう。(32)の「時ぞともなく」も歌語として固定している表現だが、「〜時だという様子でもなく」などと訳すことができる。(33)(34)のように不定表現に付く表現も慣用的なものだが、「特にいついつだ、このときだという様子でなく」「だれそれに、というふうでもなく」という訳が可能だろう。

二節で先行研究を確認した際には、これまでに次のような訳出方法が示されてきたことを見た。

A　Xという事物の存在・発生が否定される意味での訳し方

・Xというわけではない
・Xというほどでもない
・Xということはない

B　Xという事物の存在・発生が否定されない意味での訳し方

・Xと感じられない
・はっきりXということがない、Xと決まっていない
・Xということに限らない（X以外も含めた全体にわたる）
・意図的にXするわけではない
・Xということが明らかではない

今見たとおり、Aは逐語訳としては適当ではない。「となし」の意味をより的確に捉えているのはBの方と考えられるが、Bの方にも解釈のバリエーションがある。特に、体言に接続する場合は、「〜の区別が無い」という意味合いを表すパターンもある。こうしたそれぞれの解釈の仕方については六節で検討したい。

次項では、「と」が引用助詞であることとを考え合わせながら、「となし」の最も妥当な解釈について考える。

五―三　引用助詞「と」の機能を考慮して

「となし」は、体言や動詞終止形に限らず、次のように、動詞命令形、終助詞、助動詞、助詞を受ける用例もある。佐佐木（二〇〇五）等では、「となし」に用いられる「と」は引用助詞と考えられているが、これは妥当な見方だろう。

(35)「なだらかの御答へや。言ひもていけば、誰が名か惜しき」とて、強ひて渡りたまへともなくて、その夜は独り臥したまへり。（源氏・夕顔・4・484）

(36)すみなれし人かげもせぬわがやどに有明の月は出でよともなし（和泉式部集・378）

(37)かすがののけふななくさのこれならで君をとふ日はいつぞともなし（赤染衛門集・477）

(38)…、「御供に」とて、度々、中納言を召すに、「参り給はむ」ともなければ、明日になりて、蔵人御使にて、…（宇津・国譲下・816）

(39)麓に宿りたるに、月もなく暗き夜の、闇にまどふやうなるに、遊女三人、いづくよりともなく出で来たり。（更級・287）

動詞命令形や終助詞などは文末に現れる形式であり、それらも含む多様な要素を受ける点から考えて、「と」は引用助詞と見るべきであろう。

前項では、「となし」が、「〜という様子でない」などの、様態表現と解せられることを見た。すなわち、「となし」の「〜と」は、文脈内に登場する特定の誰かの発言・思惟の内容ではなく、語り手の視点から、事態の様子を描写する形式と言える。このような「〜と」は、ある事態が一般にどのように認められるかを、「〜と思われそうな様子で」のような意味を持つ引用句の形で示したものと考えられる。そして、それを「なし」によって打ち消す形を取ることで、「〜と」に引かれるような内容が一般に認められない、という意味を表すことになる。

六　解釈のパターン

前節では、体言・動詞終止形に接続する用法を中心に検討し、「となし」は、ある事態が一般にどのように認められるかを引用句の形で示す「～と」と、そのような認められ方を否定する「なし」によって構成される形式であり、「～というふうでない」「～という様子でない」という意味で解せられると考えた。

本節では、検討を保留していた派生的な意味合いについて考えたい。

六―一　「～の区別が無い」

対義語の関係にあるX・Yの二語を用いた、「X・Yとなし」という型がある。

(40) 院、うち笑ませ給ひて、「否、それは、えあるまじきことなり、公私となく馴らはれたれば。かの稚児に教へ果てられむ末つ方なむ、いと聞かまほしき」など、さまざまに、いにしへのあはれなることも、いささか惚け惚けしからず仰せらる。（宇津・楼上上・860）

(41) 夜中、暁ともなく、門もいと心かしこうももてなさず、何の宮、内わたり、殿ばらなる人々も出であひなどして、…（枕・一七二・301）

(42) 五十三年に出で来たれば、老ひたる若きとなく、親子もわかず一度に病みければ、起きたる人少なくぞありける。（栄花・三十九・下・525）

(43) ながれゆくもみぢのいろのふかければたつたの川はふちせともなし（躬恒集・3・477）

(44) あきはつるをりもこはぎぞしられけるうへしたばともなくなりぬれば（和泉式部続集・619）

(45) ききつともきかずともなくほととぎすこころまどはすさよのひところ（祐子内親王家歌合・17）

(46) 人しれずものおもふころのそでみればあめともしらずなみだともなし（入道右大臣集・35）

(40)の「公」「私」や(41)の「夜中」「暁」は対義語のペアである。こうした表現は、「～の区別が無い」という意味で捉えられている。「となし」が「～という様子でない」のように解されることを考慮すると、こうした用例はまず、Xである様子が見て取れず、逆にYである様子も見て取れないという意味で捉えられる。その結果、対義語の関係にあるX・Yを両極として、その中間のあり方を含意することにもなるだろう。「区別が無い」意を表す類型はこのように生じるものと説明できる。

六―二　「いつも」「一面に」

「いつとなく」「いづことなく」は、「いつも」「一面に」という意味で取られることがある。

(47) いつとなくぬるるたもとはいにしへをしのぶるつゆとなりぬべきかなかへし（朝忠集・38）

(48) 人知れぬ御心づからのもの思はしさは何時となきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへわづらはしう思し乱るることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。（源氏・花散里・2・153）

(49) みかさやまさしても見えず夏なればいづこともなくあをみわたれり（好忠集・103）

(50) ささがにのいづこともなくふく風はかくてあまたになりぞすらしも（蜻蛉・下・340）

五節で論じたように「となし」は「～という様子でない」という意味を示す表現であり、右の用例のように「いつも」「一面に」という解釈が必ず出

るわけではない。「いつ」「いづこ」を受ける「となし」の用例でも、次のように、「時間がいつだと分かる様子でない」、あるいは、「場所がここだと分かる様子でない」という、「となし」の本来的な意味で捉えられる場合がある。

(50) 殿はまづ、入道の御方に参り給ひて、「例ならぬ御有りさまになんとうけたまはり、おどろきながら、月ごろになりぬる病者の、いつとなきを見給へすてで［＝いつ亡くなるか分からないのをお見捨てせず］」などきこえ給へば、入道殿、まづうち泣き給ひて、…（寝覚・四・314）

(51) 大堰の御方は、かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人はいつとなく紛らはさむ［＝いつか分からないうちに引っ越そう］と思して、神無月になん渡りたまひける。（源氏・乙女・3-83）

(52) 道いと露けきに、いとどしき朝霧に、いづこともなくまどふ心地したまふ。（源氏・夕顔・1-180）

時間や場所が特定される様子ではない、という意味合いから、「いつでも」「どこでも」という意味合いが提喩的に拡張したものと説明されよう。

六―三　「特に～ない」

「特に～ない」「とりたてて～ない」という解釈のパターンがあることについて考える。

(53) 忌日など果てて、例のつれづれなるに、弾くとはなけれど、琴おしのごひてかきならしなどするに、忌なきほどにもなりにけるを、あはれにはかなくても、など思ふほどに、あなたより、…（蜻蛉・上・137）

(54) …、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてものしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、…（源氏・若菜上・4-18）

(55) …、今は、なかなかの上臈になりにてはべり、まして御暇なき御ありさまにて、心のどかにおはしますをりもはべらねば、宿直などに、そのこととなくてはえさぶらはず、そこはかとなくて過ぐしはべるをなん。（源氏・蜻蛉・6-220）

(53)の傍線部は「特に弾くという様子ではなく」、(54)の傍線部は「とりたてこの血筋だというふうでもなく」、(55)の傍線部は「特にこれといったことがある様子でなくては」のような訳が文脈に合致するだろう。次のように、「特に」「とりたてて」の意味に相当する「ことさらに」「わざと」といった副詞が共起し、その意味合いを明示する場合もある。

(56) ことさらにうらむともなしこのごろの［悶々として辛い］ねざめばかりは［あなたに］しらせてしかな（小大君集・107）

(57) わざと返り事とはなくてのたまふ、侍従なむ［尼君に］伝へけるとぞ。（源氏・東屋・6-102）

(58) ［源氏は］「いとつれづれにて、わざと遊びとはなくとも、久しく絶えにたるめづらしき物の音など聞かまほしかりつる［私の］独り琴を、いとよう尋ねたまひける」とて、宮も、こなたに御座よそひて入れたてまつりたまふ。（源氏・鈴虫・4-383）

この、「特に」「とりたてて」という意味はどこから生じるのだろうか。

小林典子（一九八七）は、「特に」などの副詞を序列副詞と呼び、従来の副詞分類（情態副詞・程度副詞・陳述副詞）と異なる性格を持つことに言及している。すなわち、序列副詞は「文中の要素に読み手や聞き手の注意を引きつけ、その要素を暗黙のうちに比較の対象と了解されるカテゴリーの中で順序づけることにより、対比的に際立たせる機能」を持つという。これは、副助詞に類する機能と言えよう。

(58)では、「遊び」（＝管弦の演奏）という様態が見て取れることは否定されるが、後に続く部分で、「独り琴」（＝琴を独りで鳴らす）が行われていることが述べられる。小林典子（一九八七）の説明を踏まえてこの「わざと遊びとはなくとも」の意味を解すると、「遊びと」の示す様態を際立たせて否定しつつ、暗黙のうちに、その様態と同一カテゴリーの中で比較の対象となる事柄（後続文脈の「独り琴」など）が成立することにも言及している、ということになろう。

ある様態が見て取れることが否定されるとき、現実にはその様態と見なされそうな事態が成立している場合が多いだろう。文脈にもよるが、「となし」は、否定される様態と同一カテゴリーの、他の様態を肯定するという含意が生じやすいのではないだろうか。「とくに～ない」「とりたてて～ない」という意味合いは、何らかの様態を認め、それと対比しながら、ある様態にあることを否定するという文脈で生じる解釈と考えられる。そうした含意の存在を明示するのが、(56)～(58)の「ことさらに」「わざと」といった「序列副詞」だと言えよう。

七　上代の「生けるともなし」について

最後に、先行研究において議論の対象となった次の用例について触れたい。

(59)　白玉の見が欲し君を見ず久に鄙にし居れば生けるともなし［伊家流等毛奈之］（⑨再掲、万葉・十九・4170）

この用例の「ともなし」は、助動詞リの連体形に接続している。通常、連体形に後接する語としては体言が想定されるため、助詞の「と」が用いられている点が不審とされてきた。

しかし、中古においても、用例数は多くないものの、次のように連体形に接続する「となし」の用例が見出される。

(60)　あとをみてしのぶもあやし夢にてもなに事のまたありしともなく（和泉式部集・712）

(61)　今年いたう荒るるとなくて、斑雪ふたたびばかりぞ降りつる。（蜻蛉・下・362）

これは、「となし」が連体形を受けうる表現であることを示しているのではないだろうか。いわゆる連体終止法の用例が上代から起こっていることは山内（一九六三）などにおいても論じられていることであり、「いけるともなし」の「と」が助詞であることに大きな疑いを持つ必要は無いものと思われる。

八　まとめ

本稿の内容を要約すると次のようになる。

（一）「となし」は「と」と「なし」の間に係助詞「は」「も」以外の要素が割り込むことはほぼ無く、緊密に結びついている。また、「なし」はカリ活用を持たない。中古語において、ひとまとまりで固定した古語と意識されていた可能性がある。（三節）

（二）「なし」が終止形をとる「となし」の形や、「ことぞ」「ときぞ」を受ける「となし」は歌語と見られるが、その一方で、「となく（て）」「とはなけれど」「そのこととなく」「それとなく」などのようにほぼ散文専用の表現も存在する。中古語において「となし」は生産的な面を持ち合わせていた。（四節）

（三）体言または動詞終止形に接続する「となし」は、形態的に固定しておらず、用いられる体言・動詞も語彙的に多様で生産的である。そこで、体言または動詞終止形を受ける用例を分析することで、中古語における「となし」の意味を考え、そこから他の用法がどのように派生するかを考えるという手順で議論を進める。（五節）

（四）「となし」は、前接語の表す事物の存在・発生を否定する意味は持たず、肯定する意も持たない。（五節一項）

（五）諸注釈書の解釈では、「となし」は前接語の表す事物の存在・発生を否定するものが大半を占めるが、「～らしくない」「～ようでない」「～というふうでない」等の、様態を描写する表現による訳出のパターンがある。「となし」の表す意味としては、後者の方が妥当である。（五節二項）

（六）引用助詞「と」の機能を考慮すると、「～となし」の「～と」は、ある事態が一般にどのように認められるかを、「～と思われそうな様子で」のような意味を持つ引用句の形で示したものと考えられる。そして、それを「なし」によって打ち消す形を取ることで、「～と」に引かれるような内容が一般に認められない、という意味を表すことになる。（五節三項）

（七）対義語の関係にあるX・Yの二語を用いた「X・Yとなし」は、Xであることが見て取れず、逆にYであることも見て取れない様子を表し、結果、その中間のあり方を含意することになるところから派生した用法と考えられる。（六節一項）

（八）「いつとなく」「いずことなく」は、「いつも」「一面に」という意味で取られることがあるが、これは、時間や場所が特定される様子ではないという意味合いから提喩的に拡張したものと説明できる。（六節二項）

（九）「特に～ない」という解釈のパターンがあるのは、「となし」が、否定される様態と同一カテゴリーの、他の様態を肯定する含みを持ちやすいためと考えられる。すなわち、何らかの様態を認め、それと対比しながら、ある様態にあることを否定するという文脈で生じる解釈と考えられる。（六節三項）

（一）～（三）は前提的な考察であり、「となし」の文法的性格については（四）～（六）で記述した。（七）～（九）は、「となし」の訳出方法に一定のパターンがあることの事情を説明しようとしたものである。

従来の研究において、中古語の「となし」が問題とされることは殆ど無かった。本稿においても十分に検討できなかった部分もあったように思う。今後の研究の進展を俟ちたい。

注

一　国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（ＢＣＣＷＪ）』によって、「動詞終止形＋とも｛無い／無く｝」という語列を検索したところ、109例得られたが、比較的話し言葉に近い「Yahoo!ブログ」の例は３例に過ぎなかった。

二　歌集の調査結果の中には、重複歌がしばしば含まれる。基本的に、重複歌の用例は、より古く成立した作品の方のものを採っている。具体的には、次のような方針で重複歌の用例を処理した。

（一）『新編国歌大観』では、第三巻で収録した歌集を第七巻でも収録している場合がある。それらは、かなり性格の異なる伝本を選んでおり、含まれる歌の数や種類にも差がある。そこで本稿では、両者とも調査対象とし、重複歌については、基本的に第三巻の方の用例を採取した。

（二）勅撰和歌集に、他の私家集や歌合類と重複する歌がある場合は、私家集や歌合類の方の用例を採取した。

（三）「古今和歌六帖」「三十人撰」等の私撰集に、他の私家集や歌合類と重複する歌がある場合も、私家集や歌合類の方の用例を採取した。

（四）私家集同士で重複する歌がある場合は、より成立が古いと考えられる方の用例を採取した。

（五）散文系の資料に、歌集から引用した和歌の用例がある場合は、引用元となった歌集の用例の方を採取した。

調査資料（用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を［　］に示した。）

○散文――浜松中納言物語・夜の寝覚・狭衣物語・栄花物語：日本古典文学大系／竹取物語・伊勢物語・土佐日記・平中物語・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・更級日記：新編日本古典文学全集／

宇津保物語：室城秀之（一九九五）『うつほ物語　全　改訂版』おうふう
○歌集――古今和歌集：新編日本古典文学全集／後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集：中村康夫・立川美彦・杉田まゆ子監修（一九九九）『二十一代集〔正保版本〕ＣＤ―ＲＯＭ』岩波書店／以上を除く中古の歌集（私家集・歌合）：『新編国歌大観　ＣＤ―ＲＯＭ版　Ver. 2』

※用例の検索には次のデータベースを利用した。
・日本古典文学大系：国文学研究資料館『大系本文データベース』（https://base3.nijl.ac.jp/）
・新編日本古典文学全集：国立国語研究所（二〇一七）『日本語歴史コーパス』バージョン 2017. 3（https://chunagon.ninjal.ac.jp/）

参考文献

井上美里（一九七六）「生けるともなし、生けりともなしのとについて」『奈良女子大学国文学会誌』二〇　pp.26-34
小田勝（二〇一五）『実例詳解　古典文法総覧』和泉書院
桑田明（二〇〇一）『古典に近づく文法』風間書房
小林賢次（一九六八）「否定表現の変遷―「あらず」から「なし」への交替現象について―」『国語学』七五　pp.45-62
小林典子（一九八七）「序列副詞―「最初に」「特に」「おもに」を中心に―」『国語学』一五一　pp.96-82
佐伯梅友（一九六三）「「あり」と「なし」」『古文研究』四　pp.6-14
桜井光昭（一九八二）「歌語の性格―古今和歌集を中心に―」『国文学研究』七六　pp.13-23（早稲田大学）
佐佐木隆（二〇〇五）「「生けりとも無し」と「生けるとも無し」―語結合・構文―」古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考 13』pp.7-32（新典社）
佐藤武義（一九九六）「歌語論の展開と現状」『国際文化研究科論集』四　pp.37-53（東北大学大学院）
初玉麟（一九八三）「光の当てられなかった「またとない機会」―格助詞トの一用法をめぐって―」『言語』一二―三　pp.95-97
時枝誠記（一九五四）『日本文法　文語篇』岩波書店
間宮厚司（一九九〇）「生ケリトモナシと生ケルトモナシ」『鶴見大学紀要（国語国文学篇）』二七　pp.227-236
宮田和一郎（一九五九）「歌語および歌語的なるもの（一）」『平安文学研究』二三　pp.4-12（平安文学研究会）
山内洋一郎（一九六三）「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』三〇　pp.33-41（広島大学国語国文学会）
山口佳紀（一九七〇）「情神（ココロド）考」『聖心女子大学論叢』三五　pp.5-22

【付記】本稿は、ＪＳＰＳ科研費（研究活動スタート支援、課題番号 16H07401）による助成を受けたものである。

＊原稿受理　平成二十九年十二月十一日

＊＊教養教育科